

大果・良食味・貯蔵性に優れる中晩生カンキツ新品種「佐賀果試35号」

岡部 春菜

佐賀県果樹試験場 常緑果樹研究担当

1. はじめに

佐賀県のカンキツは温州ミカンを主体に生産されているが、年間を通して出荷量を平準化し、経営安定と労力分散を図ることを目的に、中晩生カンキツが導入されている。中晩生カンキツの栽培面積は329haで(2020年時点)、「不知火」を中心に、イヨカン、「清見」^{きよみ}、「麗紅」^{れいこう}、「せとか」など様々な品種が栽培されている。

「不知火」は、剥皮性が良く、高糖度で食味良好、じょうのう膜が柔らかく食べやすいなど優れた特性を持つ一方、樹勢低下や小玉果の発生、減酸不良などにより販売価格の低下が問題となっている。

そのような中、高品質で収益性の高い佐賀県オリジナルの中晩生カンキツ品種の開発が求められていた。そこで、大果・高糖度・早期減酸を育種目標として「佐賀果試35号」(写真1)を開発した。

2. 品種育成の経過

1996年に佐賀県果樹試験場において、成熟期が12月下旬から1月上旬で酸切れが良く多汁である「西之香」^{にしのかおり}(「清見」×「トロビタ」オレンジ)を種子親に、剥皮性が良く高糖度で年内に成熟する「太田ボンカン」を花粉親として交配を行った。得られた交雑実生を無加温のガラス室内において、一本仕立てで伸長させ育苗した。

1997年に穂木を採取し、露地のカラタチに接ぎ木後、結実を促進させるために、一本仕立てで伸長させ果樹棚へ誘引した。

1999年から果実品質調査(果実重、糖度、クエン酸含量、種子数、剥皮性、食味など)を開始し、目標とする250g以上の大果で糖度(Brix)12以上、1月中旬に酸含量が1%以下となる果実特性が認められたことから予備選抜した。

さらに無加温ハウス内に高接ぎを行い、目標とする

特性を再度確認した。また、じょうのう膜が薄く食感や食味に優れ、剥皮性が良く種子がほとんど入らないなど、優良な特性を有することから2005年に1次選抜した。

2006年から2012年にかけて無加温栽培において苗木の樹体特性(樹勢、枝梢の性質、トゲの発生など)と果実特性(果実品質、裂果、階級調査、肥大特性)の調査を行い、その優良性が認められたことから2012年に「佐賀果試35号」と命名した。2015年8月に品種登録出願を行い、2017年8月21日に品種登録された(第26212号)。

3. 無加温栽培における品種の特性

発芽期は3月中旬、開花期は4月下旬であり、果実の完全着色期は11月下旬である。

樹勢は「不知火」、「はるみ」と同じ中程度、樹姿は中間である。

枝梢の密度は密、太さと長さはともに中で「不知火」と同程度であり、接ぎ木および苗木での増殖初期や徒長した夏枝にトゲの発生が認められるが、経年によりほぼ消失する。

葉身の形は紡錘形であり、硬化する時期には種子親である「西之香」と同様の波状になる。葉の大きさは「不知火」、「はるみ」に比べ大きく、厚さは「不知火」よりも薄い。

花は単性の有葉花が主体となり、着花が多い部位では総状花序が見られる。「不知火」、「はるみ」と同じく紡錘形の白色花弁を5枚形成する。「不知火」、「はるみ」に比べ花弁の長さは長く、花の重量は重い。花粉の多少は「はるみ」と同じ中程度である。子房の形は長球で花柱の形状は直形である。

果実は果形指数で120程度の扁球^{へんきゅう}である(表1、写真1)。果実肥大は旺盛で、果実重は250g~300g程度の大果となる。

